JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究
Author(s)	敷田，麻実
Citation	江渟の久爾，50：74-85
Issue Date	2005
Type	Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/17268
Rights	本著作物は江沼地方史研究会の許可のもとに掲載するものです。Copyright (C) 2005 江沼地方史研究会．敷田麻実，江渟の久爾，50，2005，pp.74-85.
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究

敷田麻実

一、はじめに

よそ者とは一般に、同じ地域や空間内部にいる関係者ではなく、自分たちとは異質な存在として捉えられる人である。日常生活の中でも、「余所者(よそ者)」や「旅の人」または「風の人」として、主に地域外から来る人々を指すことが多い。そこには、自分たちとの区別を意識した「差」が存在し、自分は相手とは異なるという主張が込められている。

こうした差は時に「差別」につながり、地域内の自分たちとよそ者の差を、過度に強調することも多い。それは、地域内の人々(身内)が外から入って来る者より優れていることや、逆によそ者が地域内の自分たちを凌駕したり、害悪を持ち込んで禍をもたらしたりすることへの懸念を暗黙の前提にしている。よそ者に対するこのような設定は、意識的にまた無意識に、地域内の自分たちとの差を演出することで生み出されたと考えることができる。

しかし一方で、よそ者の存在が好意的に取り扱われることも少なくない。例えば、関(二〇〇〇)は北海道の「えりも緑化事業」で、よそ者である営林署職員が地元住民と協働して成果をあげた例を報告している。また、最近は地域づくりやまちづくりと呼ばれる分野や地域振興(以下「地域づくり」と総称する。)でも、「よそ者」の役割が積極的に評価されるようになってきた。地域外の住民であるよそ者のパワーを利用すべきだという意見も見られる(世古、二〇〇一)。このように、よそ者については、以前からの「招かれざる客」としての否定的な評価と、最近のまちづくりなどに見られる肯定的な評価が混在している。

以上のような背景には、地域のことは地域で解決し、よそ者の介入は不必要とする「地域の自給自足主義」と、優れた者であれば受け入れることは厭わないと考える「現実的な考え方」が両立していると思われる。しかしここで重要なことは、このようなよそ者の性質ではなく、それを前提にした上で、よそ者と地域がどのような関係を持ち、地域がどのようによそ者を活用できるかという積極的な視点であろう。これはよそ者を「資源」と捉え、地域はそれを有効に使う必要があるとした野田(二〇〇〇)と共通する。特に最近は地域づくりを進めようにも地域に十分な人材がいないという悩みもあ

り、地域内の住民の主体的参加とよそ者の活用が地域にとって重要になってきている。途上国の環境保全や資源管理を研究対象とした佐藤も、「外部(よそ者)アクター」が参加する地域資源の保全活動が一九九〇年以降注目されてきていると報告している。(佐藤、二〇〇二)。

そこでこの論文では、地域づくりの中で一般に使われる「さまざまなよそ者」(以下「よそ者」に統一。)を定義し、地域との関係を明らかにした上で、地域の中で果たす役割を議論し、その役割が発揮される際のメカニズムを考察した。そして、よそ者と協働する地域づくりの可能性を提案した。

なお本稿では、よそ者など地域内外の関係者を、論述の際に「アクター」として表現した。またここでいう地域とは、日常生活圏の範囲に近い区域で、一般的に使われる「地域コミュニティー」とほぼ同じ意味で用いた。

二、よそ者とは何か

よそ者について検討する場合、よそ者の定義やその特性を最初に述べておかなければならない。日常会話で使用されている「よそ者」は、前述したように地域内部にいる身内とは異なる存在を表している。しかし本稿では、地域づくりで一般的に使われている「よそ者、ばか者、若者」に含まれる、好意的な意味を持ったよそ者も想定した。同様な使用法は途上国支援でも登場する。主に先進国から途上国に来る援助・支援者、いわゆる「開発ワーカー(野田、二〇〇〇)」はある意味でよそ者である。彼らのもたらすメリットは一般に大きく、受け入れ国では「ドナー」と呼ばれ、歓迎されることも多い。

地域づくりなどで最近よく登場する「土の人」・「風の人」の場合、よそ者は明らかに「他者のまなざし」をもたらす存在である(菊地、二〇〇二)。他者のまなざしとは地域内の人々とは違う視点でものを見、また考えることである。よそ者は、地域内にいると日常性に埋もれて持つことが難しい感覚や考えを持っている。その結果、よそ者に接する地域住民は、絶対だと思いこんでいたものがそうではないことに気づく。つまり「裸の王様」を指摘した子供たちのように、よそ者自身が持つ異質性が、「常識」の持つ虚像をあぶり出す存在として捉えられることも多い。

こうした性格を持つ存在は「トリックスター」と呼ばれている。ラディンら(一九七四)は、トリックスターが、いたずら者・ペテン師として知られる普遍的な人物とした上で、それを「創造者であり破壊者」になる矛盾した存在だと述べている。このような解釈例には、田中真紀子外務大臣(当時)を評価した矢野(二〇〇二)の「田中真紀子トリックスター論」がある。矢野は田中真紀子というよそ者が存在してはじめて、外務省の「常識離れした特異な体質」が明らかにされたと主張する。

トリックスターの存在は何も近代に限らず、ギリシャ神話にも見いだされる、ある意味で普遍的な存在であろう(ケレーニイ、一九七四)。また荒井(一九七八)は、トリックスターを道化とも呼ばれる存在とした上で、道化が主人公になった作品の例として、セルバンテスの『ドンキホーテ』を紹介している。このようによそ者は「他者性」を過剰に示すことで、内部で通用する常識が全てではないということを示唆する存在だと考えられる。そのためよそ者には、地域や組織内の常識やルールから逸脱していることが求められる。

そして、よそ者が持つこうした「超える部分」は、異なるがゆえに評価できる内容となる。

これに関連して、筑紫は梁石日との対談の中で、在日外国人は日本社会にとってユニークな役割を持つと述べている。そして「日本社会は別の場所から見るとこう見える」と気づかせる役割を、よそ者の異分子であることの良さとして評価している(梁・筑紫、二〇〇三)。この場合には、よそ者を社会に必要な「要素」として扱い、先に述べた矢野の主張のようにその役割を評価している。こうしたよそ者の視点に注目した菊地(一九九九a)は、よそ者の持つ「外部の視点」は、自意識を高めるための媒体であると述べている。

ここまで、地域を中心によそ者を捉えてきたが、よそ者の異質性や他者性は何も地域の内部と外部の差によって生ずるのではない。よそ者がよそ者たり得るのは、内部にいるアクターたちとの差違であり、それは空間的な隔たりだけで生ずるとは考えられない。むしろその差違を生じさせる要素は空間の差ではなく、よそ者が何かを超えて地域にはない視点や基準で行動している点にある。その際に重要なことは、内外の境界を越える「越境」である。

この越境に関する民俗に注目した篠原(二〇〇三)は「見えない境界」を越えることも含むと述べている。そして、国境や領域などを超える際に規範や伝統などの「不可視なもの」を横断する例をあげている。つまり内部にいるアクターから見れば、よそ者とはある境界を越えた存在だと捉えることができる。そのためことさら彼我の差を強調することになるのであろう。

三、よそ者の役割とその働き

(一) 地域にとっての「よそ者効果」

自分たちとは異なる価値観や常識を持つよそ者は、地域に好意的に受け入れられる存在であることも多い。前述したように、最近は地域づくりやまちづくりに関心が集まり、それに伴いよそ者を重視する、いわば「よそ者期待論」さえ生まれている。出典は明確ではないが地域づくりの現場ではよく使われる「よそ者・ばか者・若者」という言説はその典型である。そこでいくつかの事例をあげながら、よそ者が地域にとってどのような「利益」をもたらすのかを検証したい。

実際によそ者を「活用」している例として田中(二〇〇二)は、京都府美山町にある芦生原生林の保全の事例を取り上げ、原生林の価値を生かすためには、ネットワークやそこで出会う「異質な他者」の存在が重要であると述べている。この場合の異質な他者とは、芦生の京都大学演習林の教職員やダム反対にかかわる人だと、田中は分析している。また松村(二〇〇一)は南会津の開発ではよそ者をうまく取り込んで定住させ、そこに研究者がかかわって環境保全を進めていると主張している。こうした事例は、よそ者が地域とかかわることで、特に意図せずとも何らかの変化、それも地域にとって望ましいそれが起こるという「よそ者効果」である。

ではよそ者効果とはどのようなものだろうか。まず、よそ者が地域にない知識や技能を持ち込むことがあげられる。よそ者が途上国の地域とかかわり、その際に地元が持たない知識や技術を用いて支援する事例を井上(二〇〇四)が報告している。同様に菊地(一九九

九)は、高知県大方町の砂浜美術館を調査し、そこでは外部アクターから知識・情報・技術を導入していると分析した。そしてそのための「メディア」として砂浜美術館が機能していると主張している。ただしよそ者の効果に言及した折井・上野(一九八七)は、外部アクターが内部に影響を与える、またはアイディアそのものが外部にあるとする研究が多いことを指摘し、むしろ内部から起こる革新の重要性を強調している。この点に関しては後で言及したい。

次に、よそ者の持ち込む知識の活用ではなく、よそ者による地域の「励起」効果がある。その事例としては、すぐれた芸術家が地域に短期・長期に滞在し住民と交流したり、創作したりして刺激を受ける「アーティスト・イン・レジデンス」があげられる。加藤(一九九九)、はそれが芸術の創造性涵養につながると述べている。こうしたプロセスには知識や技能の移転効果も含まれるが、地域外からよそ者としての芸術家を呼び、その刺激を生かして地域内の創造性を高めようとする、よそ者の積極的な利用法のひとつだと考えることができる。石川県加賀市の山代温泉に滞在した北大路魯山人も同様の事例であろう。細野燕台という資産家の手引きで山代に逗留した魯山人は、さまざまな創作活動を地域で行った。よそ者としての魯山人の創作活動が地域の芸術・文化に与えた影響は、現在も無視できない。

さらに、よそ者の持つもうひとつの効果として、地域住民がほんらい持っている知識、「ローカルノレッジ」の表出(いわゆる言語化)支援が考えられる。藤垣(二〇〇三)はローカルノレッジの表出には「手助け」が必要なことが多く、よそ者の存在はそれを支援できると述べている。同様に、奄美の自然に魅せられ、地域の人々ですら気付いていない地域のさまざまな事柄を調査記録した中原喜久子を鬼頭(一九九八a)が紹介し、よそ者だからこそ日常性に没していた事柄を見いだせたと評価している。

そして、地域の変容を促進する効果をあげたい。よそ者の持つ異質性は前述したように、地域側に「気づき」をもたらし、そこから地域自体が変容する。それはもともと地域が持っている資源や知識を、よそ者を利用して変化させることでもある。よそ者の声を借りてとか、風の人が風を吹かすという言説はこれを指していることが多い。第二次世界大戦後の愛媛県での生活改善運動を調査した小國(二〇〇四)は、よそ者という改良普及員とかかわることで、農村の女性が明確に自己を主張できるように変容したことを報告している。

最後に、よそ者が持つ「地域とのしがらみのない立場からの解決案」の提案があげられる。中世の僧など、権力から離れた者によって和睦などが成立することがあったという研究例を今井・金子(二〇〇〇)が指摘しているが、内部のしがらみに捕らわれない立場だからこそ、よそ者は優れた解決策を提案できるのではないか。これは前述した開発ワーカーが途上国で演ずる役割でもある。企業組織と企業文化について最新の研究をレビューしながら分析した佐藤・山田(二〇〇四)は、組織文化に一定の距離をおくメンバーが「変革」の担い手となると述べている。組織と同化していない存在こそが組織を変革できるという主張は、行政や地域政治に同化しない、いわば反主流の存在が地域を変えてゆくというよそ者効果とよく似ている。

以上、よそ者が地域に与える効果を事例から分析してまとめると、①技術や技能などの知識の地域への移入、②地域の持つ創造性の惹

起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域(や組織)の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決の提案だと考えられる。

(二) よそ者を必要とする地域

よそ者の持つ効果は認められてきたが、よそ者がなぜ必要なのかに関しては十分な議論があるとは言えない。地域づくりの場でもよそ者の参加は必要条件だというように頻繁に語られるが、具体的にその必要性は示されてこなかった。例えば増田(一九九九)は、よそ者を受け入れ、彼らとの「混血の文化」を持つことが重要だと述べているが、なぜよそ者が必要かという問いには答えていない。そこで、現在の地域やコミュニティーがよそ者を必要とする理由に関して言及したい。

まず、地域やコミュニティーの形成や維持には、そもそもよそ者が必要だという議論がある。実践共同体に言及したウェンガーら(二〇〇二)は、コミュニティーの形成にはアウトサイダーの視点が重要であると述べている。これはコミュニティー形成の際に視点の異なる個人の支援が有効ということだが、よそ者が「岡目八目」でコミュニティーの問題を見いだす「外部の視点」効果も込められている。前出の増田の主張もこれと一致する。このように異なる知識や視点が必要だとする主張は、よそ者と地域住民の役割や立場を区別し、その交差から生み出されるものへの期待を含んでいる。

しかし、そもそも地域住民だけで地域の問題解決を試みても、よそ者が持ち込むアイディアや提案を、すべて否定したり無視し続けたりすることは現実的ではない。菊地(二〇〇二)がエコミュージアムに関して論じた中で述べているように、地域自体がよそ者なしでやって行くことはできない。つまり、よく言及される「自立した地域」はイメージとしては描けるが、今日のように地域相互の依存度が大きい時代にはまずそぐわないし、それ以前でも「隠れ里」のような設定の場所や地域は、実際には考えられなかったのではなかろうか。

その理由は、地域が置かれた現在の状況に求めることができる。まず、地域が閉じた状態でいることに無理がある。今日のように交流人口が増加し、物流・交通・インターネットが国内各地まで浸透すると、地域外から孤立して自らの地域を維持することがほぼ不可能になっている。そして、仮に地域外との交流を絶とうとしても、観光客など地域外から積極的に地域に入ってくる人々を排除することはできない。これは物理的にもできないし、また排除コストの面からも無理がある。

次に、地域が持つ解決手段が必ずしも「最適解」だとは言えない。限られた数の地域住民だけで解決することは、地域やコミュニティーの自立という視点からは一見、優れているように見えるが、実際には地域自ら選択肢を限定していることになる。また、地域やコミュニティーにその能力があっても、社会環境や、より上位の行政機構・政府の意向で、コミュニティーによる解決が十分機能しないことも多い(佐藤、二〇〇二)。さらに同質なコミュニティーにそもそも柔軟な解決ができるかという疑問もある。これに関して、広田(二〇〇四)は、同質なコミュニティーの危険性を指摘した上で、よそ者を排除するのではなく、その存在を許容するようなシステムが必要だと述べ、学校教育を例に「異質な他者」つまりよそ者との共存が今後の公教育の課題だと主張している。

以上のように、よそ者は地域に必要とされる存在だが、よそ者と地域側がどのようにかかわるかがより重要であり、次節ではそれを述べる。

(三) よそ者の受容と主体性

浜松市の地域産業について調査した河野(二〇〇二)は、独創的企業が多い浜松市では「よそ者」が多く受け入れられていると指摘し、それはよそ者でも優れていれば受け入れる「開放的風土」があるからだとした。しかし、地域が開放的であれば、自然とよそ者が地域や組織に「参加」し、前述した効果を発揮するとする考えは、あまりに安易であろう。むしろ、「よそ者効果」を認め、よそ者を受け入れる場合、地域あるいは組織がどのようによそ者と協働できるのか、地域づくりにかかわる関係者ではなくとも、その仕組みや「作法」を知りたいと思うことだろう。

この点については、よそ者の地域への参加に言及した井上(二〇〇四)が、よそ者が地域にかかわり、地域ガバナンス(地域経営)に参加するには、「正当性」が必要だと主張している。この正当性とは、利益があることや行為の正しさ、文化的に必要とされることだと井上は述べている。それがない場合にはよそ者の地域への参加は受け入れられにくくなると考えられる。また場合によっては、よそ者の基準で地域内の活動を進めることは、地域のアクターたちが持つ既得権益を侵し、特にそれまで主流であったアクターは疎外されてしまうことが多い。そのため反主流となったアクターから「しっぺ返し」を受ける可能性を、途上国支援の経験を持つ佐藤(二〇〇四)が指摘している。

もともと地域内で自分の主張や思いを表現することは、よそ者ではなくともある種のリスクを伴う。自分の意見や判断を明確にすることで、地域内でさまざまな軋轢を生ずる可能性である。しかしよそ者の持つ発想や異質性を活用しようとすれば、自由によそ者の意見や思いを表出させなければならない。個々の努力でそれを実現することも必要だが、そのリスクを伴う表出が組織的に進められることで組織自体も変化すると、今井・金子(二〇〇〇)は述べている。よそ者の特性を活用するには、地域を単純に開放するのではなく、よそ者が地域で意思表示するリスクを下げることが重要である。そして地域がこうしたよそ者の主張に耳を傾ける場を創る必要があろう。松村(一九九九)が指摘しているように、それが「よそ者と地域住民の交錯」につながると思われる。さらにその交錯から何かが生み出される時にはじめて地域は変容するのであり、単なるよそ者の受容とよそ者効果の発現には差がある。

ところで、ここまで地域がよそ者を受容する視点で論じてきたが、それは地域に入るか入らないかを決めるよそ者側に主体性を認めることだ。しかし、地域側が一方的に受容側であり、よそ者によってはじめて変化が起こるとする考えは、やはり「よそ者期待論」から脱していない。網野ら(二〇〇二)は、大陸からの渡来人が日本に技術を持ち込んだという発想を否定し、もともと日本側に技術や知識の基盤があって、入ってきた技術を上手に消化して、それ以上のものを創り出したのだと主張している。それはまさに店を開くよそ者ではなく、店を開く場所、つまり地域側が重要だということだ。この点では、主体はよそ者ではなく、地域側だと考えられる。

逆に、極端な地元主義に徹して地域だけで問題解決を図ることも、

前述したように問題がある。よそ者によって地域が「かき乱される」ことを恐れたり、外来型開発の「脅威」を説くあまり、よそ者による地域の変容を一切否定したりする立場は、最初からよそ者による変化を「悪」だとする前提に立っている。太田（二〇〇一）は、閉じた体系を持つ地域の文化が、原初的な状況から外部の影響を受けて変化すると考えることに疑問を示し、それは外部との接触によって起こる積極的な文化の創造、つまり「トランスポジション」だと見た。このように地域の変容は、むしろその地域にとって必要な、順応的なプロセスでありえる。そこで、ここではむしろ、地域と外部の相互作用によって両者がともに変容することだと捉えたい。これに関して鬼頭（一九九八b）は、地元である地域とよそ者が相互変容する視点を主張している。

さらに別の見方をすれば、野田（二〇〇〇）が述べるように、地域側がよそ者という「資源」を有効に使う力を持つ必要があるということになる。それは最近「地域力」と呼ばれている地域の基礎力のひとつであり、いわば「よそ者使いの上手な地域」になることだと考えられる。このように地域とよそ者のかかわりは、どちらに主体性があるというより、アクターそれぞれが主体性を持って、地域という活動の場に参加するプロセスであり、そのせめぎ合いや相互のポジショニングから、地域の活力や変容が生み出されるのだと考えられる。

（四）よそ者賞賛の是非と地域

よそ者が地域住民の持つ知識の不足部分を補完する、あるいは地域にはない技術や技能を持ち込むことは、前述したようによそ者によるポジティブな効果である。しかしその一方で、よそ者が単純に地域に便益をもたらすという素朴な期待は検証されなければならないだろう。

またよそ者が地域に影響を与える一方通行では、単に「よそ者による地域の変容」であり、地域の自律は無視されがちになる。地域にとって利益をもたらすよそ者の移入を純朴に歓迎することもまた、よそ者に対するひとつの反応だと考えられるが、こうしたよそ者に対する「無条件の評価」は必ずしも一般的ではない。

これに関連して、極端な場合には、よそ者主導で地域を変革してしまうことも考えられる。こうした変革は「外来型開発」としてむしろ否定されなければならないが、実際には「ろくでもない」よそ者による開発は後を絶たない。その対極に鶴見（一九八九）らが主張してきた「内発的発展」があると考えられる。もっとも、外部から地域が受ける影響を懸念するあまり、よそ者の影響を全否定することもまた危険である。

次に、地域づくりや地域の活性化を急ごうとするあまり、自治体の長や住民が地域外から高名な指導者や専門家・研究者などのアドバイザーを呼んでくることが多くある。もちろん、外部のブレーンと町の職員が協働して風力発電に成功した山形県立川町の事例などの「成功例」も多く報告されている（飯田ほか、二〇〇三など多数）。しかし、このような場合、来訪したよそ者が自らリスクを負うことは少なく、第三者的なアドバイスを繰り返すことも多い。

彼らの経験や学習に基づいた有効性が高いアドバイスであることは多いし、それが効果的なことも否定はできない。しかし笠羽（二〇〇四）が述べるように、よそ者の評価が一面的であることも多い。

それが仮に有効だとしても、その効果が継続するかがより重要だ。アドバイザーが去ってしまえば元に戻ってしまうような地域づくりは、誰も望まないだろう。それはあたかも地域に岡持（おかもち）を下げて来訪し、料理の香りだけをかがせて立ち去る「出前」であって、彼らは決して地域で「店を開く」ことはない。つまり、地域の持つリスクを分担はしない。

むしろ、アドバイザーがいなくなっても地域自体が継続して行く力を付けられてこそ、地域づくりの成果と呼べるのではなかろうか。地域力と呼ばれている「地域の総合力」がそれを表していると思われる。また、湯布院のような先進地の地域リーダーは、「まちづくりには終わりがない」と言っている（吉井、二〇〇一：小林、二〇〇一）。この点でも短期的な成果を生むだけのアドバイザーは否定される必要がある。

さらに、そもそも地域づくりには「最適解」はないのではなかろうか。それは企業経営にとって最適解の存在が否定されるのと同じく、さまざまな条件の下で、複数の「正解」が存在することであろう。ともすればアドバイザーが持つ知識の押し売りになりがちで、地域住民が持つ地域の知、「ローカルノレッジ」（鬼頭、二〇〇二）が否定されたり、評価されなかったりする例は多い。よそ者が地域に入り、地域住民を何らかの活動のためにファシリテートし参加させることが無分別に正しいと考える研究や運動は批判されるべきである（菊地、二〇〇二）。よそ者が地域の人々を何らかの活動に参加させると考える前に、よそ者が地域にいかにして参加するかを考えることが必要である（佐藤、二〇〇三）。

途上国援助に参加する専門家の立場について分析した野田（二〇〇〇）や佐藤（二〇〇四）が同様な指摘をしている。野田は途上国の開発支援で、ひとつのやり方が正しいと思いこむことでオプションを無視してしまうリスクを問題にしている。また佐藤は、途上国に向かう専門家は自らの理想の実現のために努力してはいけないと端的に指摘した。

以上のような視点から、短期的なアドバイザーのようなよそ者を呼び、彼らの提示する「最適解」に従って地域づくりを図る手法には問題や限界があり、それに代わる新たなモデルの提示が必要なことが指摘できる。

そのようなモデルのひとつとしては、敷田らが示しているサーキットモデルがあげられる。サーキットモデルとは、オープンソース型の知識創造プロセスを描いたモデルであり、敷田・森重らによって、地域創造やＮＰＯ活動などを進める際に有効なことが報告されている（その詳細な解説は、敷田・森重、二〇〇三：敷田・末永、二〇〇三：敷田、二〇〇五などを参照）。このモデルは石川県加賀市の片野鴨池で進められている活動のベースにもなっている。実際、片野鴨池では、地域内外の多数のよそ者に片野鴨池で「店を開く」機会をつくり、その店同士をネットワークすることで新たな成果を生み出そうとしている。そして地域に店が多く開くことが結果的に地域を豊かにし、地域の選択肢を広げるという解決策を提案している。この点では、地域の「選択肢を豊潤化しておく」ことが重要だとする松井（二〇〇四）の主張と一致する。

（五）地域内よそ者と地域内外部空間としての宿

よそ者とは地域外から来る外来者を指すことも多いが、前述した

「越境」の視点で考えれば、むしろ地域の内外を問わず「異質な他者の視点」を持てる存在だと捉え直すことができる。菊地（一九九九）も、地域住民は地元で、地域外から来る人々がよそ者という設定には疑問を呈し、地元の住民がよそ者と同じ視点を持つことができると述べている。筆者の調査した京都府網野町（現在の京丹後市）では、地域外のよそ者と地域内部にいるよそ者が協働して「鳴り砂の浜（琴引浜）」を保全している（敷田、二〇〇二）。そこでは、地域をいったん出ることで外部者の視点を持った松尾省二氏や、地域内にいながら外部者との接触で「異質な他者の視点」を持つに至った松尾庸介氏らが「地域内よそ者」として、地域外よそ者と協働している。このように地域内部にいながらよそ者の視点を持つことで、地域の変容を生み出すこともまた可能であろう。

地域内よそ者とは、地域にいながら他者の視点を持てる、ある意味で地域内にいながら「越境」した存在でもある。こうした存在は、何らかの学習や経験を通して、地域が持つしがらみや常識を乗り越えてゆく。内なる境界を越えることこそ、ほんらいの越境ではなかろうか。外に出ることで成り立つ越境は、ある意味で既存の基準や常識からの逃避にもなる。地域内よそ者とは、こうした困難なプロセスを越えた者で、それは地域を越えたよそ者よりも貴重な存在であろう。

ところで、先の網野町の事例と関連して面白いのは、主要なアクターである松尾省二・庸介父子は家業で民宿を経営する。また、津軽半島の大畑村で地域づくりを進める角本孝夫氏も旅館業を営んでいる（金子・大澤、二〇〇二）。さらに、地域自体が温泉場で宿が多く、そこに来るさまざまな人たちを地域の変容にかかわらせている例として、有名な大分県の湯布院の事例がある。また石川県加賀市では、前述した魯山人の山代温泉の旅館への逗留をあげることができる。そこに共通するのは「宿」の存在であり、宿がよそ者と地域住民との「交錯の場」になっていることが示唆される。

宿は地域の中にありながら、「旅の者」を泊める場所であり、ある意味で羽目を外せる「非日常的空間」でもある。このような場所は地域内にありながら異質の場で、よそ者がのびのびと表明できたり、それを地域側が受け止めたりできる空間となる。網野（一九九六）は、中世の「無縁」たちが集まる場所として「宿」の存在をあげ、ある種の「アジール」だと述べている。そこには異質性という共通の要素があり、地域内にこのような「地域外の場」を用意することもまた、ひとつの工夫だと考えられる。

四、結　論

本稿では、地域づくりでその役割が注目されているよそ者について、先行研究からよそ者の定義や特性を明らかにしたうえで、よそ者が地域にもたらす効果を検証した。そしてよそ者が持つ役割や効果を積極的に評価した。多くの地域で認められるよそ者効果とは、技術や技能などの知識を地域へ移入、創造性の励起や地域の持つ知識の表出支援、地域の変容の促進、そして第三者的立場からの問題解決などであり、よそ者が地域に何かをもたらすという設定に基づいていることが多い。

しかし本稿では、このような一方が他方に影響するだけではないよそ者と地域の関係を考察した。そして、地域づくりの場で一般に言われる「よそ者期待論」でもなく、逆に地域が外部から独立して

地域自立でもない、地域がよそ者を「うまく使うモデル」を提案した。

もとよりこうした「よそ者使い」は簡単にできることではない。ともすればよそ者の持つ文化を過度に取り入れ、自らのアイデンティティを失う。しかし、よそ者の持つ力を利用して地域が変容するには、孤立した自前主義ではなく外部の文化を受容し、再編集しなければならない。そして、よそ者の持ち込む知識や技能が地域を変容させたように彼らには見せながら、実際にはそうした知識や技術を新たな文化に昇華させる能力は地域側に備わっている。その変容のプロセスこそが地域づくりと呼ばれる。地域とはその変容に耐えうる膂力(りょりょく)を持った存在であるべきだ。

また、よそ者とは地域外から来る他者ではなく、何らかの基準や境界を越えている存在としたうえで、「地域内よそ者」の存在を示唆した。すべてのよそ者が外部から来るのではなく、地域内部からもよそ者は生み出せる。むしろ地域内部にいながら何かを越えた存在、地域内よそ者の方がより重要なのではなかろうか。

また地域内部での越境空間の必要性を示し、その場としての「宿」に言及した。宿とは、よそ者の持つさまざまな知識や主張が開放される非日常空間になりうる。そして地域へのゲートウエイとしてよそ者を地域へ誘う場となる。

以上のように本稿では、よそ者が地域とかかわることで起きる変容に関して言及し、地域づくりでどのように位置づけるのか論じた。地域とよそ者のかかわりは特別なケースではなく、ごく日常的に起こりうる。そこでどのような関係を持つかは、地域側とよそ者の試行錯誤のプロセスの中で決まる。豊かな地域とは、多様なよそ者を受容したうえで、よそ者と協働しながら地域を変容させることができる地域だろう。

持続可能な地域であるためには変容を恐れない。よそ者との創造的な関係が地域を豊かにする。

〔参考文献〕

網野善彦ほか『網野善彦対談集「日本」をめぐって』講談社、二三五頁、二〇〇二年
網野善彦『増補　無縁・公界・楽』平凡社、三八二頁、一九九六年
荒井健二郎「道化とその現代的意義―トリックスターについて」一九～二五頁、一九七八年
藤垣裕子『専門知と公共性―科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会、二二四頁、二〇〇三年
広田照幸『教育』岩波書店、一一三頁、二〇〇四年
飯田哲也ほか「座談会　環境NGOと政策形成―環境運動の新しい動向」『環境と公害』三三(一)、三七～四四頁、二〇〇三年
今井賢一・金子郁容『ネットワーク組織論』岩波書店、二七二頁、二〇〇〇年
井上　真『コモンズの思想を求めて―カリマンタンの森で考える新世界事情』岩波書店、一六二頁、二〇〇四年
金子勝・大澤真幸『共同取材　見たくない思想的現実を見る』岩波書店、二六三頁、二〇〇二年
笠羽晴夫『デジタルアーカイブの構築と運用　ミュージアムから地域振興へ』水曜社、一九一頁、二〇〇四年
加藤種男「芸術文化が未来を救う：マージナルアートへの期待」佐々

木晃彦編『文明と文化の視角』東海大学出版会、四～一九頁、一九九九年
ケレーニイ＝K「第四部　神話的あとがき」『トリックスター』晶文社、三〇九頁、一九七四年
菊地直樹「「地域づくり」の装置としてのエコ・ツーリズム―高知県大方町砂浜美術館の実践から」『観光研究』一〇(二)、一九～二八頁、一九九九年a
菊地直樹「エコ・ツーリズムの分析視覚に向けて―エコ・ツーリズムにおける「地域住民」と「自然」の検討を通して―」『環境社会学研究』五、一三六～一五一頁、一九九九年b
菊地直樹「エコミュージアム研究に向けた若干の視点」『エコミュージアム研究』七、八七～九二頁、二〇〇二年
鬼頭秀一「日本の自然の権利訴訟と生物多様性の保全―アマミノクロウサギに託されたもの」『科学』六八（三）、二一七～二二二頁、一九九八年a
鬼頭秀一「環境運動、環境理念研究における「よそ者」論の射程―諫早湾と奄美大島の「自然の権利」訴訟の事例を中心に―」『環境社会学研究』四、四四～五九頁、一九九八年b
鬼頭秀一「リスクと社会的リスク」『科学』七二(一〇)、一〇三～一〇三五頁、二〇〇二年
小林華弥子「第七章　ゆふいんとまちづくり」西川芳昭・松尾匡・伊佐淳編『市民参加のまちづくり―NPO・市民・自治体の取り組みから―』創成社、一〇～一一八頁、二〇〇一年
河野英子「自動車部品メーカーの経営革新―自動車産業集積地、浜松地域の事例―」『JETI』五〇（四）、一七～一七二頁、二〇〇二年
増田萬孝「農村の免疫力と自己再生の条件」『農業および園芸』七四（一〇）、一〇四九～一〇五五頁、一九九九年
松村和則「山村再生と環境保全運動―「自由文化空間」と「よそ者」の交錯」『環境社会学研究』五、二一～三六頁、一九九九年
松村和則「第九章　レジャー開発と地域再生への模索」鳥越皓之編『自然環境と環境文化』有斐閣、二一七～二四二頁、二〇〇一年
松井正治「環境的正義の来歴―西表島大富地区における農地開発問題」松井健編『沖縄列島　シマの自然と伝統のゆくえ』東京大学出版会、四九～七〇頁、二〇〇四年
野田直人『開発フィールドワーカー』築地書館、一四二頁、二〇〇〇年
小國和子「〝根っこ〟のある組織化を目指して―戦後日本農村における生活改良普及員の経験に学ぶ」佐藤寛編『援助と住民組織化』アジア経済研究所、一九五～二二六頁、二〇〇四年
折井正明・宇野善康「地域内発生イノベーションの普及と促進集団―長野県南安曇野豊科町における「古民家再生イノベーション」をめぐる普及促進集団「民家を守り育てる会」に関する事例研究」『社会心理学研究』三(一)、一七～二八頁、一九八七年
太田好信『トランスポジションの思想』世界思想社、二八四頁、二〇〇一年
ラディン＝P・ケレーニイ＝K・ユング＝C・G『トリックスター』晶文社、三〇九頁、一九七四年
佐藤　寛「参加型開発の「再検討」」佐藤寛編『参加型開発の再検討』アジア経済研究所、三～三六頁、二〇〇三年

佐藤　寛「住民組織化をなぜ問題にするのか」佐藤寛編『援助と住民組織化』アジア経済研究所、三～三四頁、二〇〇四年
佐藤　寛編『援助と住民組織化』アジア経済研究所、二五二頁、二〇〇四年
佐藤郁哉・山田真茂留『制度と文化　組織を動かす見えない力』日本経済新聞社、三三四頁、二〇〇四年
佐藤　仁『希少資源のポリティクス』東京大学出版会、二五四頁、二〇〇二年
関　礼子「共生を模索する環境ボランティア―襟裳岬の自然に生きる地域住民」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学：シリーズ環境社会学』新曜社、一〇六～一一七頁、二一二頁、二〇〇〇年
世古一穂『協働のデザイン―パートナーシップを拓く仕組みづくり、人づくり』学芸出版社、二二三頁、二〇〇一年
敷田麻実「サーキットモデルによる創成教育の学習モデル」『工学教育』五三(一)、三五～四〇頁、二〇〇五年
敷田麻実「知識創造サーキットモデルの提案：よそ者と協働する琴引浜スタイルの環境保全」『Ship and Ocean Newsletter』五六、六～七頁、二〇〇二年
敷田麻実・森重昌之「持続可能なエコツーリズムを地域で創出するためのモデルに関する研究」『観光研究』一五(一)、一～一〇頁、二〇〇三年
敷田麻実・末永聡「地域の沿岸域管理を実現するためのモデルに関する研究：京都府網野町琴引浜のケーススタディからの提案」『日本沿岸域学会論文集』一五、二五～三六頁、二〇〇三年
篠原　徹「総論　越境する民俗の現代的意味」篠原徹編『越境』朝倉書店、一～八頁、二〇〇三年
田中　滋「河川の流域、意味の流域―芦生・なめこ生産組合から美山町・グリーンツーリズムへ」木平勇吉編『流域環境の保全』朝倉書店、四七～五九頁、二〇〇二年
鶴見和子「内発的発展論の系譜」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会、四三～六四頁、一九八九年
ウェンガー＝エティエンヌ・マクダーモット＝リチャード・スナイダー＝ウィリアム＝M『コミュニティ・オブ・プラクティス―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社、三九八頁、二〇〇三年
矢野絢也「田中真紀子というトリックスター」『文芸春秋』四、一二四～一二九頁、二〇〇二年
梁石日・筑紫哲也「「身体」を喪失した日本人」『週間金曜日』四四三、八～一三頁、二〇〇三年
吉井茂人「第八章　長浜のまちづくりと景観形成」西川芳昭・松尾匡・伊佐淳編『市民参加のまちづくり―NPO・市民・自治体の取り組みから』創成社、一一九～一三九頁、二〇〇一年